

広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 第66号 2017 25-33

# 父親の子育て支援講座における父親の変容に関する事例研究

趙 碩  
(2017年10月4日受理)

A Case Study on the Effect of a Fathering Support Lecture on Attendee Fathers

Shuo Zhao

**Abstract:** This paper focuses on the transformation of participating fathers after attending fathering support lectures held in the B community center. The lectures provide valuable experience for the future development of fathering support. Using naturalistic observation and interviewing the lecturer, we reached the following conclusions. First, there were significant changes in fathers' attitudes toward interpersonal skills. More importantly, fathers recognized the importance of the role of being a father. We also observed the interactions among fathers. Second, the essence of the lecture was to transmit important concepts to fathers. The lectures helped fathers to make a greater effort in their children's daily education, and to change their responses to the children's mothers. Thus, this highlights the importance of the lecturer as a third party. Finally, multiple lectures can enhance the interactions between fathers and their children and interactions among fathers.

**Key words:** childcare, transformation of fathers, father lectures, parental education of fathers  
キーワード：子育て、父親の変容、父親講座、父親教育

## 1. 問題の所在

日本では、父親の子育て参加の重要性が叫ばれて久しい。1990（平成2）年の「1.57ショック」で顕在化した少子化問題を背景に、父親の子育て参加を促す施策が公的施策としても広く実施されるようになった。父親の子育てに関する研究としては、石井（2009）の分類によれば、主に①父親の子育て参加の現状に関する研究、②父親の子育て参加を規定する要因に関する研究、③父親の子育て参加の家族への影響に関する影響の3つに分けられる<sup>1</sup>。2000年代以降、一連の子育て支援の一環として、親支援プログラムといった親

としての育ちや親自身による子育てへの支援としての親教育が注目されている<sup>2</sup>。親教育には、①母親教育、②両親教育、③父親教育という3つの類型が考えられるが、本研究は、③父親教育に着目するものである。

日本における父親教育に関する研究は趙（2017）の分類によれば、大別して「母親との対比での父親に関する研究」、「子どもを育てる役割をもつ存在としての父親に関する研究」、「成長する存在としての父親に関する研究」、「父親を対象としたプログラムに関する研究」の4つに分けられる<sup>3</sup>。趙（2017）は、最近の傾向として、父親による子育て支援に関するプログラムや、父親自身の成長や学びに関するプログラムが重要であることを指摘している。

また、2004（平成16）年度から実施された「家庭教育支援総合推進事業」（文部科学省）や、2010（平成22）年6月に開始された「イクメンプロジェクト」（厚生労働省）など、行政による具体的な父親教育への取

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：鈴木由美子（主任指導教員）、林 孝、  
伊藤圭子、宮里智恵

り組みがなされてきた。それに加え、地方公共団体や民間団体においても、父親を対象とした教育活動が展開されている。このように、父親教育のためのさまざまな試みが、行政による公的支援とともに、地域活動、民間活動として行われるようになってきている。

本論では、父親教育のひとつの重要なツールとして様々に行われている父親を対象とした子育て支援講座に注目する。特に父親の子育て支援を重点的に推進した、「次世代育成支援対策推進法」(2003年、厚生労働省)、「家庭教育支援総合推進事業」(2004年、文部科学省)に基づいて行われている父親を対象とした子育て支援講座を「父親講座」と表記する。

岡田・伊藤・一見(2014)は、地方公共団体における父親の子育て支援事業のひとつである「父親講座」の実際や動向について研究を行った。岡田ら(2014)によれば、「父親講座」の内容については、「子どもと一緒にの活動」、「学習会」、「情報交換」、「講演会」、「自分自身の活動」など様々な形態がある。また、「『父親講座』は、学習会や講演会など受動的な講座内容から、子どもと一緒に遊んだり、工作をしたり、父親同士の情報交換をしたり、父親参加型の講座に変化してきている」ことが明らかにされている<sup>4</sup>。趙(2017)は、男性の性別役割分業意識の変化を中心に、地方公共団体の子育て支援事業による「父親講座」の成立背景を明らかにした。その結果、「父親講座」を充実させるためには、父親が子育ての主体者になることや、父親自身の喜びや学びに注目することといった、新たな内容や方法が問われることを明らかにしている<sup>5</sup>。これらの研究により「父親講座」の重要性や、今後求められる「父親講座」への示唆が指摘されてきたが、「父親講座」の具体的な内容や方法については充分解明できているとはいえない。

吉岡(2009)は、市民団体「さっぽろ子育てネットワーク」による「父親講座」での父親の学習過程と意識変容について分析した。「父親講座」の効果としては、講座に参加した父親・参加者の議論、発言による父親の意識変容があげられたことがある<sup>6</sup>。吉岡(2009)の研究における「父親講座」は、親同士の議論を中心とした学習交流会という形式だった。また、6ヶ所の「父親講座」が研究の分析対象であったが、それぞれが単発の講座だった。その他、自治体における「父親講座」を、現場のスタッフにより報告したもの<sup>7</sup>や、企業における「父親講座」の実践事例を検討している研究<sup>8</sup>もある。

管見の限りではあるが、現状から見れば、「父親講座」のジャンルは多岐にわたっていると考えられる。そこで、本論では家庭教育支援事業による「父親講座」の

事例を中心に、「父親講座」の具体的な内容や方法に着目することにする。

趙(2015)は、広島県の「『親の力』をまなびあう学習プログラム」の教材を活用した「父親講座」を検討した結果、「子どもと接することから得られる学び」、「母親との関係の変容によって得られる学び」、「父親自身の学び」の3つの父親の学びが見られることを指摘している<sup>9</sup>。しかし、これらの父親の学びが、実際に「父親講座」においてどのように生じているか検討されていない。

そこで、本論では、A県B公民館の家庭教育支援事業による「父親講座」の事例を取り上げ、趙(2015)を参考に父親の学びが実際にはどのように生じているのか検討する。それを通して、「父親講座」における父親の変容を明らかにする。これらの検討を通じて、父親の子育てを充実させる「父親講座」の方向性についての示唆を明らかにしたい。

## 2. A県B公民館における「父親講座」の事例

B公民館においては、家庭教育支援事業の一環として、「イクメンにこここ広場」と題した「父親講座」が実施された。講座は、1回目9月17日(土)、2回目10月15日(土)、3回目10月29日(土)、4回目11月19日(土)、5回目12月17日(土)の5回で構成され、毎回午前10:00~11:30の1時間半であった。講座の対象者は、2歳以下の未就園児と父親(祖父も可)で、参加者の募集は、B公民館が発行している広報や、公共施設等へのチラシの配布などにより行われた。講座参加者は、1回目16名、2回目10名、3回目12名、4回目16名、5回目14名で、延べ68名であった。論者は、B公民館における「父親講座」に参加する許可を得て、研究者の立場として「父親講座」に参加し、自然観察法による観察、アンケート、インタビューによる調査を行った。

### 目的

A県B公民館で行われた5回の「父親講座」における父親の変容を自然観察法、アンケート、インタビューにより明らかにする。

### 対象者

- ・自然観察法：5回の「父親講座」に参加した延べ34組の父子(一部母子)
- ・アンケート、インタビュー：講座の講師1(女性)、講師2(女性)、講師3(女性)、講師4(男性)、講座担当者(女性)

### 期間

2016年9月~12月

## 方法

父子が活動し、会話をしたり、ふれあったりしている様子を観察・記録した。趙（2015）を参考に父親の学びとして「子どもと接することから得られる学び」、「母親との関係の変容によって得られる学び」、「父親自身の学び」の3点から分析した。

また、この分析を裏付けるものとして、講座の講師や講座担当者にアンケート、インタビュー調査を行った。アンケート調査かインタビュー調査かは、対象者の同意によって決めることにした。

1回目から4回目の調査項目は以下の通りである。

1. 講師をやってみて父親を対象とした講座と母親を対象とした講座の雰囲気に違いがありますか。
2. 父親を対象とした講座では何をねらいとしていますか。
3. 「父親講座」にきた父親は初めと終わりで様子が変わりましたか。具体的に教えてください。
4. この講座をやってよかったと思う点は何ですか。

5. 「父親講座」の講師をこれからも続けたいですか。それは、どうしてですか。

5回目の調査項目は以下の通りである。

1. 講座の担当者をやってみて、父親だけを対象とした講座、父子を対象とした講座に違いがありますか。
2. 父子を対象とした講座では何をねらいにしてい

ますか。この講座をやってよかったと思う点は何ですか。

3. 今回の「父親講座」は、連続で計5回開催されました。連続「父親講座」の開催は初めてですか。連続の意義は何ですか。
4. 5回の連続講座にきた父親は始めと終わりで様子が変わりましたか。具体的に教えてください。
5. 「父親講座」の効果について、特に母親との関係の点はどう思いますか。「父親講座」の実施を通して、家族、学校、地域、全社会への影響の点について、どう思いますか。

## 倫理的配慮

本研究の実施に当たっては、事前に、公民館館長、講座担当者、講師、参加者に研究の説明を行い、全員から同意を得た。音声録音、ビデオ撮影の許可が得られなかったため、筆記記録のみを分析対象とすることで同意を得た。なお、プライバシー保護のため、本論に登場する関係者の名前はすべてアルファベットとする。

## 講座の概要

- 1回目：父子のふれあい遊び
- 2回目：絵本の読み聞かせ
- 3回目：料理づくり
- 4回目：おもちゃづくり
- 5回目：父親の子育てに関する座談会

## 調査計画

調査計画は表Ⅰの通りである。

表Ⅰ 調査計画

回数	年月日	時間	講座名	自然観察法による父親の変容の調査（対象：父親）	アンケート、インタビューによる調査（対象：講座の講師等）
1	2016年9月17日（土）	10：00～11：30	パパと一緒に・・・「すあしでおもいっきりあそぼう、楽しいリトミック」	父親と子どもの様子を観察、記録	5項目のアンケート調査
2	2016年10月15日（土）	10：00～11：30	絵本、パパに読んでもらおうと面白い「おひぎにだっこでおはなししましょう」	父親同士の話し合いの様子を観察、記録	5項目のインタビュー調査
3	2016年10月29日（土）	10：00～11：30	パパも食育！～パパと一緒におやつを作ろう～	父子のふれあう様子と母子のふれあう様子を観察、記録（母子は分析対象外）	5項目のアンケート調査
4	2016年11月19日（土）	10：00～11：30	身近な材料でおもちゃを作ろう！	父親自身の変容を観察、記録	5項目のアンケート調査
5	2016年12月17日（土）	10：00～11：30	～本音で話そう、パパも大変！～イクメンにこにこ座談会	講師の体験談・子育ての話をする父親の様子を観察、記録	5項目のインタビュー調査

### 3. 結果と考察

#### 3.1 対象者の属性

「父親講座」参加者の属性については表Ⅱに示した通りである。

#### 3.2 講座の様子

以下、講座の様子を述べていく。

(1) パパと一緒に・・・「すあしでおもいきりあそぼう、楽しいリトミック」

「父親講座」の1回目は、父親が子どもと一緒に遊ぶ活動を中心に実施され、父親が子どもと直接ふれあうきっかけづくりを目指した。開催時期は、2016年9月17日10:00～11:30で、B公民館の大ホールで実施された。講座の参加者は父子8組、計16名であった。参加者の父親のうち6名は、B公民館の広報を見て参加申し込みをした。初めて「父親講座」に参加した父親が7名であった。講座の講師は保育士2名で、B公民館の職員である講座担当者も参加した。講座の流れは、①「こんにちは、はじめまして」、②「ふれあい遊び」、③「リズム遊び」、④「身近なものを使って遊ぼう」、⑤「手づくりおもちゃ」、⑥「最後に」であった。(2)絵本、パパに読んでもらおうと面白い「おひぎにだっこでおはなししましょう」

第2回の講座は、『親の力』をまなびあう学習プログラム』の教材を活用した「父親講座」であった。開催時期は、2016年10月15日10:00～11:30で、B公民館の和室で実施された。参加者は父子5組、計10名であった。室内には、カーペット、玩具、絵本が用意されていた。また、講座担当者が託児役を務め、ボランティアとして、子育て経験のある地域の方々が参加した。託児付きだったため、講座の中で、参加者は子どものことを気にせず話のできたので、子育てに関連する悩み、喜び、辛さなどの課題で盛り上がった。講座の流れとしては、①今日の講座の説明、②ファシリテーター紹介、③読み聞かせと歌遊び、④グループに分かれて話し合い、⑤まとめ、⑥読み聞かせ、⑦各自で読み聞かせをしてみる、⑧次回の予告、お知らせのよう

に行われた。

(3) パパも食育！～パパと一緒におやつを作ろう～

第3回の講座は、管理栄養士による料理作りに関する講座であった。講座のテーマが示すように、親子でおやつ作りの調理実習を行うことで、調理することの楽しさを知ってもらい、調理実習を含めた食育への関心を高めることを目的とした。開催時期は、2016年10月29日10:00～11:30で、B公民館の和室で実施された。参加者は父子5組、母子1組、計12名であった。第2回の講座と同じように、室内には、カーペット、玩具が用意され、託児スタッフも参加した。講座では、調理の説明、実習、試食、片付け、事後アンケート記入と進められた。

(4) 身近な材料でおもちゃを作ろう！

第4回の講座は、親子ものづくり講座であった。開催時期は、2016年11月19日10:00～11:30で、B公民館の小ホールで実施された。参加者は父子6組、母子2組、計16名であった。本講座では、親が主体となり、身近なもので簡単に作れるおもちゃの製作を行った。講座の導入では、講師が親子で楽しむものづくり講座の意義についての説明をした。ものづくり体験を通して、親と子のものづくりに対する興味と意欲を向上させると同時に、親子の絆を深めることを図った。講座の現場では、講師の指導のもとで参加者は①新聞紙で変身ぼうし、②不思議なたまご、③びっくり紹介カード、④おもしろい飛行機、⑤バランスとんぼを作成した。

(5) ～本音で話そう、パパも大変！～イクメンにこここ座談会

連続「父親講座」の最後となる今回では、前小学校校長が話題提供者として講師を務め、イクメン座談会を開催した。講師が小学校に32年間勤務の経験、小学生との接し方、自分自身の子育てを紹介し、父親たちと率直に話し合うことを目指した。話題提供では、男性の子育てについて「一人で悩まないで」、「子どもとともに成長する」という2点が重要であることが語られた。話題提供の後、お茶やお菓子を食べながら、参

表Ⅱ 対象者の属性

	保護者	子どもの性別	子どもの年齢	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
1	A	女	3歳3ヶ月	○	○	休	○	○
2	B	女	1歳8ヶ月	○	休	○	○	○
3	C	女	1歳10ヶ月	○	休	休	○	休
4	D	女	1歳9ヶ月	○	○	○	○	○
5	E	女	0歳10ヶ月	○	○	○	○	○
6	F	男	2歳7ヶ月	○	○	○	○	○
7	G	男	2歳0ヶ月	○	○	母子	母子	○
8	H	男	1歳3ヶ月	○	休	○	母子	○

加者と講師とで男性の子育てについて話し合いを行った。参加した父親からは、子育て中の不安や悩み、子どもの性別による父親のかかわり方などの問題が出された。

### 3.3 自然観察法による父親の変容およびアンケート、インタビューによる調査結果

10:00～11:30の講座実施の間、論者は観察を行った。5回の講座の記録は、左側に講座の経過を、右側にその時の父子の様子を書き入れていたものである。観察時の記録をもとに報告書を作成し、それを分析資料とした。

5回の「父親講座」の観察記録を1文ごとにエピソードとして分けていくと、総数は69個となった。分類の枠組は、①「子どもと接することから得られる学び」、②「母親との関係の変容によって得られる学び」、③「父親自身の学び」のカテゴリーとした。①について、「子ども理解」、「父子関係づくり」をキーワードとして分類した。②について、「母親への意識」、「母親の子育てのサポート」をキーワードとして分類した。③について、「子育て不安の解消」、「子育て自信」、「父親同士のつながり」をキーワードとして分類した。①、②、③に分類できないものは、「その他」とした。分類に際しては、まず、研究者2名と論者の3名が独立して分類し、その後、3人で協議して一致させた。①は45個、②は0個、③は19個、④は5個であった。

ここでは、講座のテーマに即していること、活動の特徴をよりよく表現していることを基準として、講座ごとにエピソードを2個ずつ取り上げ分析した。講座の講師等を対象としたアンケート、インタビューによる調査については、調査対象者のプライバシーに配慮して、個人が特定されないように一部省略・修正した。これらは、父親の変容を確認するために用いた。

父親の変容を分析するにあたり、父親と子ども、父親と母親、父親自身の内的な変容などの関係性に着目することから、セルマンの役割取得理論に基づいて、分析することにした。セルマンによる、役割取得の5つの段階とは「レベル0 自己中心的な役割取得、レベル1 主観的役割取得、レベル2 二人称相応的役割取得、レベル3 三人称的役割取得、レベル4 一般化された他者としての役割取得」である<sup>10</sup>。これを援用して、父親の役割取得を分析する視点とした。本論では、これらの父親の視点を次のように捉えることにした。

「視点0」は、未分化な視点である。

「視点1」は、自分を中心とした視点である。

「視点2」は、自分と子ども、または自分と他の父親を関係づける視点である。

「視点3」は、父親としての役割に気づく視点である。

「視点4」は、父親としての役割を社会全体や集団全体を関係づける視点である。

まず、「子どもと接することから得られる学び」を取り上げる。

(1)「子どもと接することから得られる学び」のカテゴリーにおける父親の変容

「子どもと接することから得られる学び」は講座の1回目、2回目、3回目、4回目に見られた。これらを講座の回数ごとに取り上げ、父親の変容を見ていく。

(講座1回目：9月17日)

- ・父親Aは子どもの目を見て動くと子どもも父親の目を見ながら動き、全体的にお互いに向かい合うことが多かった。
- ・父親C、Dは子どもの身体をゆらすことが多かった。

下線で示したように、1回目の活動では、父親が子どもに働きかける場面、また父親と子どもが互いに働きかける場面が見られた。こうした父親の行動は子どもと関係していることを示しており、ここに「視点2」の役割取得が見られる。

(講座2回目：10月15日)

- ・大部分の時間には、父親が講師の方に顔を向け、時々子どもの反応を確認していた。
- ・父親は子どもを抱きかかえ、子どもが選んだ絵本の読み聞かせを行った。

下線で示したように、2回目の活動では、父親の子どもへの注目が増えること、「子どもが選んだ絵本の読み聞かせを行った」から、父親は子どもの視点をとっていることが見てとれた。父親は、子どもとのふれあいによって子ども理解を深めていると思われる。こうした父親の行動には子どもの視点に立ってみる「視点2」の役割取得が見られる。講座の講師2へのインタビュー調査結果によれば、「お父さんは子どもと過ごすために来られるのではないか」というように、日頃仕事をして、子どもと一対一で向き合う機会が少ない父親たちは、この講座で子どもとふれあう機会をつくらることができるといえる。

(講座3回目:10月29日)

・自分が取り組んでいる作業のことを子どもに話して聞かせたり,自分が作ったものを子どもに見せながら説明したりする父親Fの姿、微笑ましい様子も見られた。  
・子どもがおいしそうに食べている様子を父親は満足そうに見ていた。

下線で示したように、父親は、父子の関わりによって日常生活では見られない子どもの姿を見たり、成長を感じたり、新たな一面を発見したりすることができた。それとともに、父子で共有できる部分が増え、父親自身も、料理づくりや子どもとの関わりを通して満足感・達成感を得ていた。こうした父親の行動には子どもとの関係での「視点2」の役割取得が見られる。講座の講師3へのアンケート調査結果によれば、「一緒に調理することが少し楽しそう」、「子どもの面倒をよくみて楽しそう」というように、父親と子どもが互いに関係しあいながら行動していることを示している。

(講座4回目:11月19日)

・父親がほめることで、子どものやる気はアップし,折り紙飛行機を何度も何度も飛ばしていた。  
・全体的に、父親と子どもとのふれあい場面は今までの講座より多く見られるようになった。

下線で示したように、父親は子どもをほめることで子どもがやる気になっていることに気づき、子どもを育てる父親としての役割に気づいたことが見てとれた。「全体的に、父親と子どもとのふれあい場面は今までの講座より多く見られるようになった」から、父親は、子どもとふれあうことに自信が出てきて、より一層父子の遊びを楽しむことができたといえよう。また、父子のふれあい活動がきっかけとなって、ほめて育てるなどの父親の役割に気づくことにつながっていると思われる。こうした父親の行動には「視点3」の役割取得が見られる。

このように、「子どもと接することから得られる学び」のカテゴリーにおける父親の視点には、「視点2」、「視点3」の役割取得が見られることを示している。  
(2)「母親との関係の変容によって得られる学び」のカテゴリーにおける父親の変容

「母親との関係の変容によって得られる学び」のカテゴリーは0個であった。しかし、講座の担当者へのインタビュー調査結果は、いくつかのことが示されていたので、以下に取り上げる。

・奥さんに対して、いままでいらっとしていたものがもつと、こう寛容に受け取れるじゃないかなとそういうこともあるかなと思いますし、母親の方もたまにこうやって、お父さんと子どもで出かけてくれることで、ちょっとリフレッシュできる部分もあるじゃないかと思うんです。あさ、一日中育児をしていて、ちょっとお父さんが子どもを連れて、出かけてくれるだけで、ちょっとひといきお茶でも飲もうかしらと、時間が持てたら、また子どもとお父さんが帰ってきたときに、フレッシュな気持ちで、接することができるじゃないかと思うんです。

以上から、父親の変容として、2点が見てとれた。第1に、母親の子育ての大変さが分かることで、父親に母親への寛容な態度が生じていることである。第2に、父親が子どもに関わることによって、母親がリフレッシュできることが、母親の子育てへのサポートにつながっていることである。

(3)「父親自身の学び」のカテゴリーにおける父親の変容

「父親自身の学び」は講座の1回目、2回目、3回目、4回目、5回目に見られた。これらを講座の回数ごとに取り上げ、父親の変容を見ていく。

(講座1回目:9月17日)

・父親たちは自己紹介や子どもの紹介を行い、特にわが子自慢に関する話をする時、父親たちの心と体の緊張はほぐれ、表情も和らぎ話も増えてくるようになった。  
・講座が進んでいくうちに、父親たちの表情が少しずつ変化し、笑顔が見られるようになった。

下線で示したように、父親が自分の考えや思いを中心に表現していることが顕著である。こうした父親の行動には「視点1」の役割取得が見られる。また、父親同士で交流ができたことが、父親の不安の軽減につながったことが見てとれた。講座の講師1へのアンケート調査結果によれば、「父親同士で意見交換ができる」、「みんな同じだということがわかり合える」、「色々な親子に接して話し合うことで、これまで悩んでいた困っていたりすることが、心配するようなことではない。みんな同じということに気付くことができる」、「子育ての中で、他の家庭との共通点を見つけたり、参考になることを知ることができる」というように、父親が他の父親たちとの関わりにおいて、情報交換や意見交流を行い、子どもに対する共通の悩みや思

いを共有することができたといえよう。

(講座2回目：10月15日)

- ・参加者の発表によれば、「すぐに飽きる」「本をやぶる」「同じ本を繰り返し要求する」などの悩みや、「どんな絵本を選べば良い?」「興味を持たせるには?」「上手な読み方は?」「自分の好みで選んでいいの?」などの疑問が出された。
- ・参加者は絵本の読み聞かせで発表した悩みや疑問を考え、話し合った。

下線で示したように、父親同士が話し合ったことによって、他者との共感の視点から課題解決の視点へと変容しているのではないかと考えられる。こうした父親の行動には他の父親との関係での「視点2」の役割取得が見られる。講座の講師2へのインタビュー調査結果によれば、「受身ではなく自分で考えて育児に参加されているのではないか」、「顔の表情は最初に来られた時よりぐっと柔らかくなって来たのではないか」、「何かひとつのテーマで話し合う機会を増やしてほしいような感じ」というように、父親が子育ての主体者になろうとする姿が見られたことを示している。

(講座3回目：10月29日)

- ・1回目から引き続き参加している父親はその他の父親と顔見知りになり、場所にも雰囲気にも慣れていた。
- ・父親は自分が作ったものを食べたり、みんなで試食したり楽しんでいた。

下線で示したように、父親同士が、互いに接する機会をつくり、普段感じている子育てについての悩みや不安を相談することができることで、個々の子育て支援へのニーズに応えることができたといえよう。こうした父親の行動には子どもや、他の父親との関係で「視点2」の役割取得が見られる。

(講座4回目：11月19日)

- ・父親たちは、他者が紹介カードを作るのを助けること、他者が作ったものを称賛することなど、父親同士の交流が多くなった。
- ・父親たちは、ものづくり過程や他者との交流を楽しんでいた。

下線で示したように、講座を通じて、次第に父親同士の会話や交流が増え、父親同士のつながりが深められたことが見てとれた。こうした父親の行動には他の

父親との関係での「視点2」の役割取得が見られる。講座の講師4へのアンケート調査結果によれば、「講師と同性なので、雰囲気慣れてくると、自然と会話ができた」、「お父さんが笑顔になった」というように、父親の表情が変容したこと、子育ての喜びを実感できていることを示しているといえよう。これらは講座の講師だからこそ気づいた父親の変容であるといえる。

(講座5回目：12月17日)

- ・話題提供の後、お茶やお菓子を食べながら、参加者と講師とで男性の子育てについて話し合いを行った。
- ・参加した父親からは、子育て中の不安や悩み、子どもの性別による父親のかかわり方などの問題が出された。

下線で示したように、講座に参加することを通して、父親としての役割に気づいたことが見てとれた。こうした父親の行動には「視点3」の役割取得が見られる。(4) 講座担当者へのインタビューから見た父親の変容

講座担当者へのインタビュー調査結果では、講座担当者だからこそ見える父親の変容が示された。具体的には、以下のようなことがあげられる。

- ・連続ですることによって、同じメンバーが何度も顔をあわすことによって、子どもも同じメンバーの人が集まることで、安心して過ごすこともできると思うし、お父さん方も、一回目二回目では口に出せなかったようなことも話ができるようになるのではないか。

下線で示したように、「父親講座」を連続して開催することの意義が示されている。

- ・参加者のなかに、今まで絵本を読み聞かせしたことがない方がいらっちゃって、他のお父さんの話を聞くと、もう夜は毎日読んでるよとか、自分が帰宅してから、子どもが寝るまでは、自分が子どもの世話をしているよとか。そういう方が、おられるのを聞いて、すごくびっくりされて、すごく意識改革された方がいらっしゃる。その後聞いたら、絵本読んでいますよって、おっしゃって、そういう意味で、そういう変化をこちらも求めていたので、大成功だなあと思いました。

下線で示したように、父親は他の父親からの影響を

受けて、講座の中だけでなく、家庭においても絵本の読み聞かせをするという「日常へのつながり」が示されている。

・もう社会がそういう風になんて思っているんだなとは思いますが、たまたま、「父親講座」にも参加してもらえたら、本音が話せたり、お父さんが交流の中で、また、新しいものも生まれてこないかなんてことはまだそこまで感じていないんですけど、期待はしています。お父さん同士のつながり、地域のつながり、そういう風に展開していけないかなんては思います。

下線で示したように、講座担当者は「父親講座」を通じて、父親同士のつながりだけでなく、地域のつながりへの展開を望むと考えている。ここには「社会変容への潜在的意図」が示されている。

講座担当者へのインタビューから次の3点が示された。第1に、「父親講座」を連続して開催することの意義が示されていることである。第2に、親としての意識改革や行動変容への視点が示されていることである。これまで「父親講座」の効果としては、父子関係づくり、父親同士の学び合いが指摘されているが、それに加え、親としての意識改革や行動変容が指摘されている点は注目に値する。ここに父親の価値観の変容へのきざしが見られると考えられる。第3に、講座担当者の意図が示されていることである。「日常へのつながり」「社会変容への潜在的意図」といったことは、講座担当者が「父親講座」で意図していることである。これらは講座担当者へのインタビューによって明らかになったことであり、今回の研究で新たに得られた知見ではないかと考える。

#### 4. 結論

本論の目的は、B 公民館における「父親講座」の事例を中心に、「父親講座」における父親の変容を明らかにすることを通して、「父親講座」の方向性に対する示唆を得ることであった。本論によって明らかになったことは、以下の3点である。

第1に、「父親講座」において、父子とともに父親同士が共に活動することの意義が示されたことである。父親同士が集まることや、父親と子どもと一緒に講座に参加することで、今まで気づいていなかった父親としての役割が自覚されることが示された。同時に、父親同士の関わりによる父親同士の協働性が見られることも示された。

第2に、講座の講師や講座担当者の果たす役割が重要であるということである。父親が日常生活で子育て行動を主体的に行うようになることや、母親への寛容な態度が見られるようになることが講座担当者から示された。また、講師や講座担当者が潜在的に持っている意図が父親にも伝わっていると考えられる。これらの点は講師や講座担当者という第三者の存在があることの重要性を示している。

第3に、「父親講座」の連続性の意義が見られたということである。それにより、父子がふれあうことはもちろん、子ども同士が互いにふれあうことや、父親同士のつながりが深められることが期待できるのではないだろうか。

以上から、「父親講座」の方向性として次の点があげられる。1点目は、父親同士が子どもとのふれあい活動を介して、子育てについて語り合える場を提供することである。2点目は、父親が子育てを通して成長したと自覚したり、親としての自分を意識したりすることができるように、講座の講師や講座担当者が果たす役割に着目することである。3点目は、単発の講座ではなく、連続した「父親講座」の展開が求められることである。

本論では、講座の全体的な父親の変容を分析したが、「父親講座」の参加人数が少ないこともあり、一人一人の父親の変容について検討はできなかった。「父親講座」に参加する個人の父親を対象に調査を行い、父親の変容のプロセスを検討していくことが今後の課題である。

#### 【付記】

本論は日本家政学会第69回大会（2017年5月28日）で口頭発表した内容に加筆修正したものである。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 石井クンツ昌子「父親の役割と子育て参加—その現状と規定要因、家族への影響について」家計経済研究所『家計経済研究』81、2009年、16-23頁。
- <sup>2</sup> 斎藤真緒「今日における子どもをもつ意味変容—イギリスにおける Parenting Education の台頭—」『立命館人間科学研究』11、2006年、125-135頁。中村真弓「カナダ・アメリカにおける Parenting Education の展開」『尚絅学園研究紀要 A. 人文・社会科学編』4、2010年、79-91頁。
- <sup>3</sup> 趙碩「日本における父親教育に関する研究の動向」広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座『学習



開発学研究』10, 2017年, 133-141頁。

- <sup>4</sup> 岡田みゆき・伊藤葉子・一見真理子「地方公共団体における父親の子育て支援」『日本家政学会誌』65(10), 2014年, 587-597頁。
- <sup>5</sup> 趙碩「父親の子育て支援講座の成立背景に関する一考察—性別役割分業意識の変化を中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』61, 2015年, 107-112頁。
- <sup>6</sup> 吉岡亜希子「子育て講座における父親の学習過程と意識変容—さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』107, 2009年, 179-193頁。
- <sup>7</sup> 長崎県教育委員会青少年社会教育課「職場で行う青少年問題父親講座」青少年問題研究会『青少年問題』35(3), 1988年, 26-29頁。秋田県教育委員会社会教育課「父親の家庭教育参加支援事業—あったか父親講座」青少年問題研究会『青少年問題』43(2), 1996年, 38-42頁。石市教育委員会社会教育課「『ハートフル父親講座』父親の家庭教育参加支援事業 職場内家庭教育講座の開設」青少年問題研究会『青少年問題』44(2), 1997年, 40-45頁。
- <sup>8</sup> 金山美和子「男性の育児を促進する子育て支援の検討(3)—企業における子育て講座の実践事例か

ら—」『上田女子短期大学児童文化研究所所報』29, 2007年, 1-10頁。

- <sup>9</sup> 趙碩「『親の力』をまなびあう学習プログラム」における父親教育教材に関する一考察」中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』61, 2015年, 107-112頁。
- <sup>10</sup> 渡辺弥生編『VLF による思いやり育成プログラム』図書文化, 2001年, 22頁。

## 【引用文献】

- 趙碩「日本における父親教育に関する研究の動向」広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座『学習開発学研究』10, 2017年, 133-141頁。
- 岡田みゆき・伊藤葉子・一見真理子「地方公共団体における父親の子育て支援」『日本家政学会誌』65(10), 2014年, 587-597頁。
- 趙碩「『親の力』をまなびあう学習プログラム」における父親教育教材に関する一考察」中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』61, 2015年, 107-112頁。
- 渡辺弥生編『VLF による思いやり育成プログラム』図書文化, 2001年, 22頁。